

第三章 陰陽五行

一、陰陽

[24] 『素問・天元紀大論第六十六』

太虚は廖廓、肇基化元にて、万物資りて始り、五運は終天にして、氣を真靈に布き、坤元を総統し、九星は朗を懸げ、七曜は周旋し、陰と曰い陽と曰い、柔と曰い剛と曰い、幽顕既に位し、寒暑弛張し、生生化化し、品物みな章かなり。

[25] 『素問・陰陽応象大論第五』

陰陽は天地の道なり、万物の綱紀、変化の父母、生殺の本始、神明の府なり。治病は必ず本に求む。故に積陽は天となり、積陰は地となる。陰は静かに陽は躁ぐ。陰は生じ陽は長じ、陽は殺ぼし陰は蔵す。陽は氣を化し、陰は形を成す。寒極って熱を生じ、熱極って寒を生ず。寒氣は濁を生じ、熱氣は清を生ず。清氣下に在れば、則ち飧泄を生ず。濁氣上に在れば、則ち臌脹を生ず。これ陰陽の反作、病の逆從なり。

故に清陽は天となり、濁陰は地となる。地氣は上って雲となり、天氣は下って雨となる。雨は地氣より出で、雲は天氣より出づ。故に清陽は上竅に出で、濁陰は下竅に出づ。清陽は腠理に発し、濁陰は五蔵に走る。清陽は四肢に実し、濁陰は六府に帰す。

水は陰たり、火は陽たり。陽は氣となり、陰は味となる。味は形に帰し、形は氣より帰す。氣は精に帰し、精は化より帰す。精は氣を食とし、形は味を食とす。化は精を生じ、氣は形を生ず。味は形を傷り、氣は精を傷る。味は化して氣となり、氣は味に傷らる。陰味は下竅に出で、陽氣は上竅に出づ。味厚き者は陰となし、薄きは陰の陽となす。氣厚き者は陽となし、薄きは陽の陰となす。味厚ければ則ち泄し、薄ければ則ち通ず。氣薄ければ則ち発泄し、厚ければ則ち発熱す。

壯火の氣は衰え、少火の氣は壯る。壯火は氣を食とし、氣は少火を食とす。壯火は氣を散じ、少火は氣を生ず。

[26] 『素問・陰陽応象大論第五』

天地は、万物の上下なり。陰陽は、血氣の男女なり。左右は、陰陽の道路なり。水火は、陰陽の徴兆なり。陰陽は、万物の能始なり。故に曰く、陰は内に在り、陽の守りなり、陽は外に在り、陰の使いなりと。

[27] 『素問・陰陽離合論篇第六』

陰陽は、これを数へて十となる可く、これを推して百となる可く、これを推して万となる可く、これを数へて万となる可く、万の大は数ふるに勝ふ可からず。然れどもその要は一なり。

天は覆ひ地は載せ、万物方に生ず。未だ地を出でざる者は、命じて陰処と曰う。（名づけて陰中の陰と曰う。）則めて地を出づる者は、命じて陰中の陽と曰う。陽はこれが正を予へ、陰はこれが主となる。故に生は春に因り、長は夏に因り、収は秋に因り、蔵は冬に因り、失常すれば則ち天地四塞がる。陰陽の変、その人に在る者は、また数の数ふ可きなり。

[28] 『靈樞・論疾診尺第七十四』

四時の変、寒暑の勝、重陰は必ず陽、重陽は必ず陰。故に陰は寒を主り、陽は熱を主る。故に寒甚だしければ則ち熱し、熱甚だしければ則ち寒す。故に曰く寒は熱を生じ、熱は寒を生ず、これ陰陽の変なりと。

[29] 『素問・金匱真言論第四』

陰中に陰有り、陽中に陽有り。平旦より日中に至るは、天の陽、陽中の陽なり。日中より黄昏に至るは、天の陽、陽中の陰なり。台夜より鶏鳴に至るは、天の陰、陰中の陰なり。鶏鳴より平旦に至るは、天の陰、陰中の陽なり。故に人もまたこれに応ず。それ人の陰陽を言へば、則ち外は陽となし、内は陰となす。人身の陰陽を言へば、則ち背は陽となし、腹は陰となす。人身の蔵府中の陰陽を言へば、蔵なる者は陰となし、府なる者は陽となす。肝心脾肺腎五蔵はみな陰となし、胆胃大腸小腸膀胱三焦六府はみな陽となす。陰中の陰、陽中の陽を知らんと欲する所以の者は、何ぞや。冬の病は陰に在り、夏の病は陽に在り、春の病は陰に在り、秋の病は陽に在りとなし、みなその所在を視て針石を施すをなすなり。故に背は陽となし、陽中の陽は、心なり。背は陽となし、陽中の陰は、肺なり。腹は陰となし、陰中の陰は、腎なり。腹は陰となし、陰中の陽は、肝なり。腹は陰となし、陰中の至陰は、脾なり。これみな陰陽表裏、内外雌雄相輪り応ずるなり。故に以って天の陰陽の応ずるなり。

[30] 『素問・生氣通天論第三』

およそ陰陽の要は、陽密かなれば乃ち固し。両者和せざれば、春ありて夏無きが若

く、冬ありて夏無きが若し。因ってこれを和する、これを聖度と謂ふ。故に陽強く密かなる能はざれば、陰氣乃ち絶ゆ。陰平かに陽秘なれば、精神乃ち治る。陰陽離決すれば、精氣乃ち絶ゆ。

[31] 『素問・生氣通天論第三』

陰は、精を蔵して起くること亟りなり。陽は、外を衛りて固きをなすなり。陰その陽に勝たざれば、則ち脈流薄り疾く、并せて乃ち狂す。陽その陰に勝たざれば、則ち五蔵の氣争ひ、九竅通ぜず。ここを以って聖人は陰陽を陳き、筋脈和同し、骨髓堅固に、氣血みな従ふ。かくの如くなれば則ち内外調和し、邪害する能わず、耳目聰明に、氣立故の如し。

[32] 『靈樞・壽夭剛柔第六』

黄帝少師に問ひて曰く、余聞く人の生や、剛有り柔有り、弱有り強有り、短有り長有り、陰有り陽有りと。願はくはその方を聞かんと。少師答へて曰く、陰中に陰有り、陽中に陽有り、審かに陰陽を知れば、これを刺すに方有り。病の始る所を得れば、これを刺すに理有り。謹んで病の端を度り、時と相応じ、内に五蔵六府と合し、外に筋骨皮膚に合す。この故に内に陰陽有り、外にもまた陰陽有り。内に在る者は、五蔵を陰となし、六府を陽となす。外に在る者は、筋骨を陰となし、皮膚を陽となす。故に曰く、病の陰の陰に在る者は、陰のケイ輪に刺す。病の陰の陽に在る者は、陽の合に刺す。病の陽の陰に在る者は、陰の経に刺す。病の陽の陽に在る者は、陽の絡に刺すと。故に曰く、病の陽に在る者は、命じて風と曰ふ。病の陰に在る者は、命じて痺と曰ふ。陰陽俱に病むは、命じて風痺と謂う。病形有りて痛まざる者は、陽の類なり。形無くして痛む者は、陰の類なり。形無くして痛む者は、その陽完うして陰傷るなり。急ぎその陰を治し、その陽を攻むる無れ。形有りて痛まざる者は、その陰完うして陽傷るなり。急ぎその陽を治し、その陰を攻むる無れ。陰陽俱に動き、乍ちに形有り、乍ちに形無く、加ふるに煩心を以ってするは、命じて陰その陽に勝ると曰ふ。これ表ならず裏ならず、その形久しからざるを謂ふなり。

二、五行

[33] 『素問・宝命全形論篇第二十五』

帝曰く、人の生に形有り、陰陽を離れず。天地は氣を合し、別れて九野となり、分

く、冬ありて夏無きが若し。因ってこれを和する、これを聖度と謂ふ。故に陽強く密かなる能はざれば、陰氣乃ち絶ゆ。陰平かに陽秘なれば、精神乃ち治る。陰陽離決すれば、精氣乃ち絶ゆ。

[31] 『素問・生氣通天論第三』

陰は、精を蔵して起くること亟りなり。陽は、外を衛りて固きをなすなり。陰その陽に勝たざれば、則ち脈流薄り疾く、并せて乃ち狂す。陽その陰に勝たざれば、則ち五蔵の氣争ひ、九竅通ぜず。ここを以って聖人は陰陽を陳き、筋脈和同し、骨髓堅固に、氣血みな従ふ。かくの如くなれば則ち内外調和し、邪害する能わず、耳目聰明に、氣立故の如し。

[32] 『靈樞・壽夭剛柔第六』

黄帝少師に問ひて曰く、余聞く人の生や、剛有り柔有り、弱有り強有り、短有り長有り、陰有り陽有りと。願はくはその方を聞かんと。少師答へて曰く、陰中に陰有り、陽中に陽有り、審かに陰陽を知れば、これを刺すに方有り。病の始る所を得れば、これを刺すに理有り。謹んで病の端を度り、時と相応じ、内に五蔵六府と合し、外に筋骨皮膚に合す。この故に内に陰陽有り、外にもまた陰陽有り。内に在る者は、五蔵を陰となし、六府を陽となす。外に在る者は、筋骨を陰となし、皮膚を陽となす。故に曰く、病の陰の陰に在る者は、陰のケイ輪に刺す。病の陰の陽に在る者は、陽の合に刺す。病の陽の陰に在る者は、陰の経に刺す。病の陽の陽に在る者は、陽の絡に刺すと。故に曰く、病の陽に在る者は、命じて風と曰ふ。病の陰に在る者は、命じて痺と曰ふ。陰陽俱に病むは、命じて風痺と謂う。病形有りて痛まざる者は、陽の類なり。形無くして痛む者は、陰の類なり。形無くして痛む者は、その陽完うして陰傷るなり。急ぎその陰を治し、その陽を攻むる無れ。形有りて痛まざる者は、その陰完うして陽傷るなり。急ぎその陽を治し、その陰を攻むる無れ。陰陽俱に動き、乍ちに形有り、乍ちに形無く、加ふるに煩心を以ってするは、命じて陰その陽に勝ると曰ふ。これ表ならず裏ならず、その形久しからざるを謂ふなり。

二、五行

[33] 『素問・宝命全形論篇第二十五』

帝曰く、人の生に形有り、陰陽を離れず。天地は氣を合し、別れて九野となり、分

れて四時となり、月に大小有り、日に短長有り、万物并せ至り、量るに勝ふ可からず。虚実キヨ吟、敢へてその方を問はんと。岐伯曰く、木は金を得て伐られ、火は水を得て滅し、土は木を得て達り、金は火を得て缺け、水は土を得て絶ゆ。万物尽く然り、竭くるに勝ふ可からず。

[34] 『素問・陰陽応象大論篇第五』

東方は風を生じ、風は木を生じ、木は酸を生じ、酸は肝を生じ、肝は筋を生じ、筋は心を生じ、肝は目を主る。それ天に在りては玄となり、人に在りては道となり、地に在りては化となり、化は五味を生じ、道は智を生じ、玄は神を生ず。神 天に在りては風となり、地に在りては木となり、体に在りては筋となり、蔵に在りては肝となり、色に在りては蒼となり、音に在りては角となり、声に在りては呼となり、変動に在りては握となり、竅に在りては目となり、味に在りては酸となり、志に在りては怒となる。怒は肝を傷り、悲は怒に勝つ。風は筋を傷り、燥は風に勝つ。酸は筋を傷り、辛は酸に勝つ。

南方は熱を生じ、熱は火を生じ、火は苦を生じ、苦は心を生じ、心は血を生じ、血は脾を生じ、心は舌を主る。それ天に在りては熱となり、地に在りては火となり、体に在りては脈となり、蔵に在りては心となり、色に在りては赤となり、音に在りては徵となり、声に在りては笑となり、変動に在りては憂となり、竅に在りては舌となり、味に在りては苦となり、志に在りては喜となる。喜は心を傷り、恐は喜に勝つ。熱は気を傷り、寒は熱に勝つ。苦は気を傷り、鹹は苦に勝つ。

中央は湿を生じ、湿は土を生じ、土は甘を生じ、甘は脾を生じ、脾は肉を生じ、肉は肺を生じ、脾は口を主る。それ天に在りては湿となり、地に在りては土となり、体に在りては肉となり、蔵に在りては脾となり、色に在りては黄となり、音に在りては宮となり、声に在りては歌となり、変動に在りては嘖となり、竅に在りては口となり、味に在りては甘となり、志に在りては思となる。思は脾を傷り、怒は思に勝つ。湿は肉を傷り、風は湿に勝つ。甘は肉を傷り、酸は甘に勝つ。

西方は燥を生じ、燥は金を生じ、金は辛を生じ、辛は肺を生じ、肺は皮毛を生じ、皮毛は腎を生じ、肺は鼻を主る。それ天に在りては燥となり、地に在りては金となり、体に在りては皮毛となり、蔵に在りては肺となり、色に在りては白となり、音に在

りては商となり、声に在りては哭となり、変動に在りては咳となり、竅に在りては鼻となり、味に在りては辛となり、志に在りては憂となる。憂は肺を傷り、喜は憂に勝つ。熱は皮毛を傷り、寒は熱に勝つ。辛は皮毛を傷り、苦は辛に勝つ。

北方は寒を生じ、寒は水を生じ、水は鹹を生じ、鹹は腎を生じ、腎は骨髓を生じ、髓は肝を生じ、腎は耳を主る。それ天に在りては寒となり、地に在りては水となり、体に在りては骨となり、蔵に在りては腎となり、色に在りては黒となり、音に在りては羽となり、声に在りては呻となり、変動に在りては慄となり、竅に在りては耳となり、味に在りては鹹あまとなり、志に在りては恐となる。恐は腎を傷り、思は恐に勝つ。寒は血を傷り、燥は寒に勝つ。鹹は血を傷り、甘は鹹に勝つ。

〔35〕『素問・金匱真言論篇第四』

帝曰く、五蔵 四時に応じ、各々収受有るか。岐伯曰く、有り。東方は青色、入り肝に通じ、竅を目に開き、精を肝に蔵す。故に病は頭に在り。その味は酸、その類は草木、その畜は鶏、その穀は麦、それ四時に応じ、上って歳星と為る。△ここを以って病の筋に在るを知るなり。その音は角、その数は八、その臭は𦄃。

南方は赤色、入り心に通じ、竅を耳に開き、精を心に蔵す。故に病は五蔵に在り。その味は苦、その類は火、その畜は羊、その穀は黍、それ四時に応じ、@惑星と為る。ここを以って病の脈に在るを知るなり。その音は微、その数は七、その臭は焦。

中央は黄色、入り脾に通じ、竅を口に開き、精を脾に蔵す。故に病は舌本に在り。その味は甘、その類は土、その畜は牛、その穀は稷、それ四時に応じ、上って鎮星と為る。ここを以って病の肉に在るを知るなり。その音は宮、その数は五、その臭は香。

西方は白色、入り肺に通じ、竅を鼻に開き、精を肺に蔵す。故に病は背に在り。その味は辛、その類は金、その畜は馬、その穀は稻、それ四時に応じ、上って太白星と為る。ここを以って病の皮毛に在るを知るなり。その音は商、その数は九、その臭は腥。

北方は黒色、入り腎に通じ、竅を二陰に開き、精を腎に蔵す。故に病は溪に在り。その味は鹹、その類は水、その畜は@、その穀は豆、それ四時に応じ、上って辰星と為る。ここを以って病の骨に在るを知るなり。その音は羽、その数は六、その臭は腐

[36] 『素問六微旨大論篇第六八』

帝曰く、善し。願はくは地理の六節に応ずる気位は何如なるかを聞かんと。岐伯曰く、顕明の右は、君火の位なり。君火の右、退行すること一步なるは、相火これを治む。復た行くこと一步なるは、土気これを治む。復た行くこと一步なるは、金気これを治む。復た行くこと一步なるは、水気これを治む。復た行くこと一步なるは、木気これを治む。復た行くこと一步なるは、君火これを治む。相火の下、水気これを承く。水位の下、土気これを承く。土位の下、風気これを承く。風位の下、金気これを承く。金位の下、火気これを承く。君火の下、陰精これを承くと。帝曰く、何ぞやと。岐伯曰く、亢すれば則ち害す、承くれば乃ち制す。制すれば則ち生化し、外に盛衰を列す。害すれば則ち敗乱し、生化大いに病む。

[37] 『素問・蔵気法時論篇第二十二』

黄帝問ひて曰く、合て人形は四時五行に法るを以って治る、何如にして従はん。何如にして逆せん。得失の意、願はくはその事を聞かんと。岐伯対へて曰く、五行とは、金木水火土なり。こもごも貴ぶりこもごも賤へ、以って死生を知り、以って成敗を決し、しかして五蔵の気、間甚の時、死生の期を決むるなりと。

帝曰く、願はくは卒くこれを聞かんと。岐伯曰く、肝は春を主り、足の厥陰・少陽主治し、その日は甲乙。肝 急に苦しめば、急ぎ甘を食ひ以ってこれを緩くす。心は夏を主り、手の少陰・太陽主治し、その日は丙丁。心 緩に苦しめば、急ぎ酸を食ひ以ってこれを収む。脾は長夏を主り、足の太陰・陽明主治し、その日は戊己。脾 湿に苦しめば、急ぎ苦を食ひ以ってこれを燥す。肺は秋を主り、手の太陰・陽明主治し、その日は庚辛。肺 気の上逆に苦しめば、急ぎ苦を食ひ以ってこれを泄す。腎は冬を主り、足の少陰・太陽主治し、その日は壬癸。腎 燥に苦しめば、急ぎ辛を食ひ以ってこれを潤し、腠理を開き、津液を致し、気墜を通ずるなり。

病 肝に在れば、夏に愈え、夏に愈えざれば、秋に甚だしく、秋に死せざれば、冬に持ち、春に起く。風に当るを禁ず。肝病は、愈ゆるは丙丁に在り、丙丁に愈えざれば、庚辛に加わり、庚辛に死せざれば、壬癸に持ち、甲乙に起く。肝病は平坦に慧え、下晡に甚だしく、夜半に静かなり。肝 酸を欲すれば、急ぎ辛を食ひ以ってこれを

散じ、辛を用いこれを補い、酸にてこれを瀉す。

病 心に在れば、愈ゆるは長夏に在り、長夏に愈えざれば、冬に甚だしく、冬に死せざれば、春に持ち、夏に起く。温食・熱衣を禁ず。心病は、愈ゆるは戊己に在り、戊己に愈えざれば、壬癸に加わり、壬癸に死せざれば、甲乙に持ち、丙丁に起く。心病は、日中に慧え、夜半に甚だしく、平旦に静かなり。心 @を欲すれば、急ぎ鹹を食ひ以ってこれを@げ、鹹を用いこれを補い、甘にてこれを瀉す。

病 脾に在れば、愈ゆるは秋に在り、秋愈えざれば、春に甚だしく、春死せざれば、夏に持ち、長夏に起く。冷食飽食・湿地濡衣を禁ず。脾病は、愈ゆるは庚辛に在り、庚辛に愈えざれば、甲乙に加わり、甲乙に死せざれば、丙丁に持ち、戊己に起く。脾病は、日@に慧え、日出に甚だしく、下晡に静かなり。脾 緩を欲すれば、急ぎ甘を食ひ以ってこれを緩くし、苦を用いこれを瀉し、甘にてこれを補う。

病 肺に在れば、愈ゆるは冬に在り、冬に愈えざれば、夏に甚だしく、夏に死せざれば、長夏に持ち、秋に起く。寒飲食・寒衣を禁ず。肺病は、愈ゆるは壬癸に在り、壬癸に愈えざれば、丙丁に加わり、丙丁に死せざれば、戊己に持ち、庚辛に起く。肺病は、下晡に慧え、日中に甚だしく、夜半に静かなり。肺 収を欲すれば、急ぎ酸を食ひ以ってこれを収め、酸を用いこれを補い、辛にてこれを瀉す。

病 腎に在れば、愈ゆるは春に在り、春に愈えざれば、長夏に甚だしく、長夏に死せざれば、秋に持ち、冬に起く。@@熱食・温灸衣を犯すを禁ず。腎病は、愈ゆるは甲乙に在り、甲乙に愈えざれば、戊己に甚だしく、戊己に死せざれば、庚辛に持ち、壬癸に起く。腎病は、夜半に慧え、四季に甚だしく、下晡に静かなり。腎 堅を欲すれば、急ぎ苦を食ひ以ってこれを堅め、苦を用ひこれを補い、鹹にてこれを瀉す。

それ邪氣の身に客するや、勝を以って相加はり、その生ずる所に至って愈え、その勝たざる所に至って甚だしく、生ずる所に至って持ち、自らその位を得て起く。必ず先づ五蔵の脈を定め、乃ち間甚の時、死生の期を言ふ可し。

二、精気神

[56] 『靈樞・本藏第四十七』

人の血気精神は、生を奉^{やしな}ひて性命^{あまね}を周^{まわ}る所以の者なり。経脉は、血気を行らせて陰陽を営^{はこ}び、筋骨を濡^{うるお}し、関節を利^りする所以の者なり。衛気は、分肉を温め、皮膚を充^みたし、腠理^{こぎ}を肥^{かんごう}し、閔闔^{かん}を司^{きよ}る所以の者なり。志意は、精神を御^{まも}り、魂魄^{きよ}を収め、寒温^{かろ}を適^あへ、喜怒^{きど}を和^なする所以の者なり。この故に血和すれば則ち経脉流行し、陰陽^{えいふく}を営^{はこ}覆^{おほ}し、筋骨^{けい}勁強^{きん}に、関節滑利^{かんと}す。衛気^{べい}和すれば則ち分肉解利^{ぶん}し、皮膚調柔^{びんじ}に、腠理致密^{かんと}なり。志意^し和すれば則ち精神專直^{せん}に、魂魄散ぜ^{ばい}ず、悔怒^{かいど}起らず、五蔵邪^ごを受けず。寒温和すれば則ち六府穀^{ろく}を化^{くわ}し、風痺^{ふうび}作らず、経脉通利^{けい}し、肢節^し安^{やす}ずるを得。これ人の常平^{じょうへい}なり。

五蔵は、精神血気魂魄を蔵^{くら}する所以の者なり。六府は、水谷^{すいこく}を化^{くわ}して津液^{しん}を行^はらす所以の者なり。これ人の天^{てん}より具受^{ぐじう}する所以なり、愚智賢不肖^{ぐちけんぶせう}以^もつて相倚^{あひ}よる無^なきなり。

[57] 『靈樞・決氣第三十』

黄帝曰く、余聞^いく人に精・氣・津・液・血・脈^い有りと。余意^いふに以^もつて一氣と為^なすのみ。今乃ち辨^わじて六名と為^なす。余その然^{しか}る所以^{ゆゑ}を知らず、願^{ねが}はくは何をか精と謂^いうを聞^きかんと。岐伯曰く、兩神相搏^{まじ}はり、合^あして形^{かたち}を成^なし、常に身に先^まんじて生^なずる、これを精と謂^いふと。何をか氣と謂^いふと。岐伯曰く、上焦^{じやう}に開^{ひら}けし、五穀^{ごこく}の味^{あじ}を宣^{のたま}き、膚^くを薰^くじ身^みを充^みし毛^けを沢^しやかにし、霧露^{きよ}の漑^しぐが若^{わか}き、これを氣と謂^いふと。何をか津と謂^いふと。岐伯曰く、腠理^{はう}に発泄^{はつ}し、汗^{あせ}出^でづること溲溲^{しん}たる、これを津と謂^いふと。何をか液と謂^いふと。岐伯曰く、穀^{こく}入り氣^き満^みち、滄^た沢^{たく}として骨^{こつ}に注^つぎ、骨^{こつ}属^{ぞく}屈伸^{くつしん}し、泄^せ沢^{たく}し脳髓^{のうずい}を補益^ほし、皮膚潤沢^{ひふ}する、これを液と謂^いふと。何をか血と謂^いふと。岐伯曰く、中焦^{ちゆう}氣^きを受け汁^{じゆ}を取り、変化^{へん}して赤^{せき}き、これを血^{ちゆう}と謂^いふと。何をか脈と謂^いふと。營^{えい}氣^きを壅遏^{おう}し、避^さぐる所^{ところ}無^なからしむる、これを脈^{みやく}と謂^いふと。

[58] 『靈樞・経脉第十』

人始め生^なずるに、先^まづ精^{しん}を成^なし、精^{しん}成^なりて脳髓^{のうずい}生^なじ、骨^{こつ}を幹^{かん}と為^なし、脈^{みやく}を營^{えい}と為^なし、筋^{きん}を剛^{かう}と為^なし、肉^{にく}を膚^くと為^なし、皮膚^{ひふ}堅^かくして毛^け髪^は長^{なが}ず。穀^{こく} 胃^いに入り、脈道^{みやく}以^もつて

通じ、血氣乃ち行る。

[59] 『素問・経脉別論篇第二十一』

食氣 胃に入り、精を肝に散じ、氣を筋に淫む。食氣 胃に入り、濁氣 心に歸し、精を脈に淫む。脈氣 經に流れ、經氣 肺に歸し、肺は百脈を朝せしめ、精を皮毛に輸る。毛と脈とは精を合し、氣を府に行らせ、府精り神明らかに、四臓に留れ、氣権衡に歸す。権衡以って平まり、氣口 寸と成り、以って死生を決す。

飲 胃に入り、精氣を游溢し、上に脾に輸り、脾氣 精を散じ、上に肺に歸し、肺は水道を調べ、下に膀胱に輸る。水精四に布し、五經并びて行き、四時五臓陰陽の動靜に合し、揆度以って常と為すなり。

[60] 『靈枢・邪客第七十一』

五穀 胃に入るや、その糟粕・津液・宗氣分れて三隧と為る。故に宗氣は胸中に積り、喉嚨に出で、以って心肺を貫きて呼吸を行う。營氣は、その津液を泌し、これを脈に注ぎ、化し以って血と為り、以って四末を榮ひ、内に五臓六府に注ぎ、以って刻數に應ず。衛氣は、その悍氣の慄疾より出で、しかして先づ四末分肉皮膚の間を行って休まざる者なり。昼日は陽に行り、夜は陰に行り、それ陰に入るなり。常に足の少陰の分間より、五臓六府に行る。

[61] 『靈枢・五味第五十六』

黄帝曰く、願はくは穀氣に五味有り、それ五臓に入り、分別すること奈何なるかを聞かんと。伯高曰く、胃は、五臓六府の海なり。水谷みな胃に入り、五臓六府みな氣を胃より稟く。五味は各々その喜ぶ所に走る。穀味酸は、先づ肝に走る。穀味苦は、先づ心に走る。穀味甘は、先づ脾に走る。穀味辛は、先づ肺に走る。穀味鹹は、先づ腎に走る。穀氣津液已に行り、營衛大いに通じ、乃ち糟粕を化し次を以って伝下すと。

黄帝曰く、營衛の行は奈何と。伯高曰く、穀始め胃に入り、その精微は、先づ胃の兩焦に出で、以って五臓を溉し、別れて兩焦より出で營衛の道に行る。その大氣の搏にして行らざる者は、胸中に積り、命じて氣海と曰ひ、肺に出で、喉嚨を循る。故に呼すれば則ち出で、吸すれば則ち入る。天地の精氣、その大數は常に出づること三入ること一、故に穀入らざること半日なれば則ち氣衰へ、一日なれば則ち氣少し。

[62] 『靈枢・營衛生会第十八』

人は氣を穀より受け、穀 胃に入り、氣 肺に伝与し、五藏六府みな以って氣を受け、その清なる者は營と為り、濁なる者は衛と為り、營は脈中に在り、衛は脈外に在り。營周して休まず、五十にしてまた大会し、陰陽相貫き、環の端無きが如し。衛氣は陰に行ること二十五度、陽に行ること二十五度、分れて昼夜と為る。故に氣 陽に至りて起き、陰に至りて止む。故に曰く、日中にして陽隴るは重陽と為し、夜半にして陰隴るは重陰と為すと。故に太陰は内を主り、太陽は外を主り、各々行ること二十五度、分れて昼夜と為る。夜半は陰隴ると為り、夜半後にして陰衰え、平旦に陰尽きて陽 氣を受く。日中は陽隴ると為り、日西ぶきて陽衰え、日入に陽尽きて陰 氣を受く。夜半にして大会し、万民みな臥する、命じて合夜と曰ふ。平旦に陰尽きて陽氣を受く。かくの如く已むこと無く、天地と紀を同じくす。

[63] 『靈枢・營衛生会第十八』

黄帝曰く、願はくは營衛の行る所、みな何れの道より来るかを聞かんと。岐伯答へて曰く、營は中焦より出で、衛は上焦より出づと。黄帝曰く、願はくは三焦の出す所を聞かんと。岐伯答へて曰く、上焦は胃の上口に出し、咽以上を并せて、膈を貫きて胸中に布き、腋に走り、太陰の分に循って行り、還って陽明に至り上って舌に至り、足の陽明に下る。常に營と俱に陽に行ること二十五度、陰に行ることまた二十五度、故に五十度にしてまた手の太陰に大会すと。黄帝曰く、人に熱き飲食 胃に下り、その氣未だ定らず、汗則ち出で、あるいは面に出で、あるいは背に出で、あるいは身半に出で、それ衛氣の道を循らずして出づるは、何ぞやと。岐伯曰く、これ外は風に傷られ、内は腠理を開き、毛蒸し理泄し、衛氣これに走れば、固よりその道を循らず。この氣慄悍滑疾、開かれて出づ。故にその道に従ふを得ず。故に命じて漏泄と曰ふと。

黄帝曰く、願はくは中焦の出す所を聞かんと。岐伯答へて曰く、中焦はまた胃口并り、上焦の後に出す。これ受くる所の氣は、糟粕を泌し、津液を蒸し、その精微を化し、上に肺脈に注ぎ、乃ち化して血と為り、以って生身を奉じ、これより貴きものは莫し。故に独り経隧に行るを得、命じて營氣と曰ふと。黄帝曰く、それ血と氣と、名を異にし類を同じくすとは、何をか謂ふと。岐伯答へて曰く、營衛は精氣なり、血は

神気なり。故に血と気とは、名を異にして類を同じくす。故に血を奪ふ者は汗する無れ、汗を奪ふ者は血する無れ。故に人に両死有りて両生無しと。

黄帝曰く、願はくは下焦の出す所を聞かんと。岐伯答へて曰く、下焦は回腸に別れ、膀胱に注ぎて滲入す。故に水谷は、常に併せて胃中に下り、糟粕と成りて俱に大腸に下り、汁を泌別し、下焦を循りて膀胱に滲入すと。黄帝曰く、人 酒を飲み、酒また胃に入り、穀未だ熟せずして小便独り先づ下るは、何ぞやと。岐伯答へて曰く、酒は熟穀の液なり。その氣悍にして以って滑、故に穀に後れて入り、穀に先んじて出づと。黄帝曰く、善し。余聞く上焦は霧の如く、中焦は@の如く、下焦は澆の如しとは、これをこれ謂うなりと。

[64] 『靈樞・癰疽第八十一』

黄帝曰く、余聞く腸胃 穀を受け、上焦 気を出し、以って分肉を温めて、骨節を養ひ、腠理を通ず。中焦は気を出すこと霧の如く、上に溪谷に注ぎて孫脈に滲み、津液和調し、変化して赤く血と為る。血和せば則ち孫脈先づ満ち、乃ち絡脈に注ぎ、絡脈みな盈ち、乃ち経脈に注ぐ。陰陽已に張り、息に因って行る。行に經紀有り、周に道理有り、天と合同し、休止するを得ずと。

[65] 『素問・痺論篇第四十三』

榮は、水谷の精気なり、五蔵に和調し、六府に洒陳し、乃ち能く脈に入るなり。故に脈を循り上下し、五蔵を貫き六府を絡ふなり。衛は、水谷の悍気なり、その氣慄疾滑利、脈に入る能はざるなり。故に皮膚の中、分肉の間を循り、盲膜を薫じ、胸腹に散ず。その氣に逆へば則ち病み、その氣に従へば則ち愈ゆ。

[66] 『靈樞・營氣第十六』

營氣の道は、穀を内るるを室と為す。穀 胃に入り、氣これを肺に伝へ、中に流溢し、外に布散し、精專なる者経隧に行り、常に營ひて已むこと無く、終りてまた始る、これを天地の紀と謂ふ。故に氣は太陰より出で、手の陽明に注ぎ、上行して面に至り足の陽明に注ぎ、下行して跗上に至り、大指の間に注ぎ、太陰と合し、上行して髀に抵る。脾より心中に注ぎ、手の少陰を循り腋に出で臂に下り、小指の端に注ぎ、手の太陽と合し、上行して腋を乗て@に出で、内に目の内眦に注ぎ、巔に上り項に下り、足の太陽に合し、脊を循り尻に下り、下行して小指の端に注ぎ、足心を循り足の少

陰に注ぎ、上行して腎に注ぎ、腎より心に注ぎ、外に胸中に散ず。心主の脈を循り腋に出で臂に下り、両筋の間に入り、掌中に入り、中指の端に出で、還って小指と次指の端に注ぎ、手の少陽に合し、上行して臍中に注ぎ、三焦に散じ、三焦より胆に注ぎ、肋に出で足の少陰に注ぎ、下行して跗上に至り、また跗より大指の間に注ぎ、足の厥陰に合し、上行して肝に至り、肝より上に肺に注ぎ、上に喉嚨を循り、頤の竅に入り、畜門に究る。その支別は、額に上り巔を循り項中に下り、脊を循り軀に入る。これ督脈なり。陰器を循り、上に毛中を過り、臍中に入り、上に腹裏を循り、缺盆に入り、下に肺中に注ぎ、また太陽に出づ。これ営氣の行なり、逆順の常なり。

[67] 『靈樞・五十營第十五』

黄帝曰く、余願はく五十營奈何なるかを聞かんと。岐伯答へて曰く、天周は二十八宿、宿は三十六分、人の氣行ること一周、千八分。日行くこと二十八宿、人の經脉上下左右前後二十八脈、周身十六丈二尺、以って二十八宿に應じ、漏水下ること百刻、以って昼夜を分つ。故に人一呼に、脈再動、氣行くこと三寸、一吸に、脈また再動、氣行くこと三寸、呼吸定息に、氣行くこと六寸。十息に氣行くこと六尺、二十七息に、氣行くこと一丈六尺二寸、日行くこと二分。二百七十息に、氣行くこと十六丈二尺、氣行き中に交通し、身を一周し、水下ること二刻、日行くこと二十分有奇。五百四十息に、氣行き再び身を周り、水下ること四刻、日行くこと四十分有奇。二千七百息に、氣行くこと身を十周し、水下ること二十刻、日行くこと五宿二十分有奇。一万三千五百息に、氣行くこと身を五十營し、水下ること百刻、日行くこと二十八宿、漏水みな尽き、脈終る。所謂る交通とは、并せ行く一の数なり。故に五十營備わり、天地の寿を尽すを得、氣およそ行くこと八百一十丈なり。

[68] 『靈樞・衛氣行第七十六』

黄帝岐伯に問ひて曰く、願はくは衛氣の行、出入の合、何如なるかを聞かんと。岐伯曰く、歳に十二月有り、日に十二辰有り、子午を經と為し、卯酉を緯と為す。天周は二十八宿、しかして一面は七星、四七二十八宿、房昴を緯と為し、虚張を經と為す。この故に房、華に至るを陽と為し、昴、心に至るを陰と為し、陽は昼を主り、陰は夜を主る。故に衛氣の行は、一日一夜に身を五十周し、昼日は陽を行ること二十五周、夜は陰を行ること二十五周、五歳を周る。この故に平旦に陰尽き、陽氣目より出で

、目張げば則ち氣 頭に上行し、項を循り足の太陽に下り、背を循り下って小指の端に至る。その散ずる者は、目の銳眦に別れ、手の太陽に下り、下り小指の端の外側に至る。その散ずる者は、目の銳眦に別れ、足の少陽に下り、小指と次指の間に注ぎ、以って上っての少陽の分を循り、下って小指と次指の間に至る。別なる者は、耳の前に至り、頷脈に合し、足の陽明に注ぎ、下行し跗上に至り、五指の間に入る。その散ずる者は、耳の下より手の陽明に下り、大指の間に入り、掌中に入る。それ足に至るや、足心に入り、内踝に出で、陰分を上行し、また目に合す。故に一周を為す。この故に日に行くこと一舎に、人の氣身に行くこと一周と十分身の八。日行くこと二舎に、人の氣身に行くこと三周と十分身の六。日行くこと三舎に、人の氣身に行くこと五周と十分身の四。日行くこと四舎に、人の氣身に行くこと七周と十分身の二。日行くこと五舎に、人の氣身に行くこと九周。日行くこと六舎に、人の氣身に行くこと十周と十分身の八。日行くこと七舎に、人の氣身に行くこと十二周と十分身の六。日行くこと十四舎に、人の氣身に二十五周し有奇分と十分身の者二、陰尽きて陰 氣を受く。その始め陰に入り、常に足の少陰より腎に注ぎ、腎は心に注ぎ、心は肺に注ぎ、肺は肝に注ぎ、肝は脾に注ぎ、脾はまた腎に注ぎ一周を為す。この故に夜行くこと一舎に、人の氣陰蔵に行くこと一周と十分蔵の八、また陽の行の如く二十五周して、また目に合す。陰陽一日一夜、合せて奇分十分身の二と十分蔵の二有り、この故に人の臥起の時に、早晏有る所以は、奇分尽きざるが故なりと。

[69] 『靈樞・動輸第六十二』

胃氣 上に肺に注ぎ、その悍氣頭に上衝する者は、咽を循り、上に空竅に走り、眼系を循り、入り脳を絡ひ、@に出で、客主人を下り、牙車を循り、陽明に合し、并せて人迎に下る。これ胃氣の陽明より別走する者なり。

[70] 『素問・五藏生成篇第十』

諸脈はみな目に属し、諸髓はみな脳に属し、諸筋はみな節に属し、諸血はみな心に属し、諸氣はみな肺に属す。これみな四支八溪の朝夕なり。故に人 臥すれば血 肝に帰す。目は血を受けて能く視、足は血を受けて能く歩み、掌は血を受けて能く握り、指は血を受けて能く撮る。臥し出でて風これに吹き、血 膚に凝る者は痺と為り、脈に凝る者は泣と為り、足に凝る者は厥と為る。この三者は、血行きてその空に反る

を得ず。故に痺厥^{ひびくつ}を為すなり。人に大谷^{たいこく}十二分、小溪^{しょうけい}三百五十三名有り、これみな衛氣^{ゐき}の留止^{りゅうし}する所、邪氣^{じあき}の客^{きやく}する所なり。針石^{しんせき}縁^{えん}ってこれを去る。

〔71〕『靈樞・五癰津液別第三十六』

水谷はみな口に入り、その味に五有り、各々その海に注ぎ、津液各々その道に走る。故に上焦は氣を出し、以って肌肉を温め皮膚^{みだ}を充し、津^つと為る。その流れて行らざる者は、液と為る。天暑^{てんじゆ}く衣厚^{いあつ}ければ則ち腠理開く。故に汗出づ。寒分肉^{はんぶん}の間に留り、沫^{まつ}を聚^{あつ}れば則ち痛を為す。天寒^{てんかん}ければ則ち腠理閉じ、氣^き渋り行らず、水^{すい}下り膀胱^{ふくたう}に留り、則ち溺^{にやく}と氣と為る。

五藏六府、心これが主と為り、耳これが聴と為り、目これが候と為り、肺これが相と為り、肝これが将と為り、脾これが衛と為り、腎これが外を主ると為る。故に五藏六府の津液、尽く上に目に滲み、心悲しみ氣^き井へば則ち心系急し、急すれば則ち肺葉挙がり、挙がれば則ち液^{えき}上に溢る。それ心系挙がり肺常には挙がる能はず、乍ち上り乍ち下る。故に泣^{なみ}して泣出づ。中熱すれば則ち胃中穀を消し、穀消ゆれば則ち虫上下に作り、腸胃充郭するが故に胃緩み、胃緩めば則ち氣逆す。故に唾出づ。五穀の津液和合して膏と為る者は、内に骨空に滲み、脳髓を補益して、陰に下流す。陰陽和せざれば則ち液をして溢れしめて陰に下流し、髓液みな減じて下り、下ること過度なれば則ち虚し、虚するが故に腰脊痛みて脛^{けい}痠す。陰陽氣道通ぜず、四海閉塞し、三焦写せず、津液化せず、水谷腸胃の中に并せ、回腸に別れ、下焦に留り、膀胱に滲むを得ざれば則ち下焦脹り、水溢るれば則ち水脹を為す。これ津液五別の逆順なり。

〔72〕『靈樞・邪氣藏府病形第四』

黄帝岐伯に問ひて曰く、首面と身形とや、骨に属し筋に連なり、血と同一に氣と合するのみ。天寒なれば則ち地裂け氷凌^{こりやう}る。それ卒かに寒なれば、あるいは手足懈惰^{かいだ}す。然りしこうしてその面衣せざるは、何ぞやと。岐伯答へて曰く、十二經脉、三百六十五絡、その血氣はみな面に上りて空竅^{くうきやう}に走り、その精陽氣目に上りて精を為し、その別氣は耳に走りて聴を為し、その宗氣は鼻に出でて臭を為し、その濁氣は胃に出で唇舌^{しんせつ}に走りて味を為す。その氣の津液みな面に上^く燠し、しかして皮また厚く、その肉堅し。故に天氣甚だ寒なるもこれに勝る能はず。

〔73〕『靈樞・陰陽清濁第四十』

黄帝曰く、願はくは人氣の清濁を聞かんと。岐伯曰く、穀を受くる者は濁、氣を受くる者は清なり。清は陰に注ぎ、濁は陽に注ぐ。濁にして清なる者は、上に咽に出づ。清にして濁なる者は、則ち下行す。清濁相干せば、命じて乱氣と曰ふと。黄帝曰く、それ陰清にして陽濁、濁なる者に清有り、清なる者に濁有り、これを別つことは奈何と。岐伯曰く、氣の大別は、濁は上に肺に注ぎ、濁は下に胃に走る。胃の清氣は、上に口に出づ。肺の濁氣は、下に経に注ぎ、内に海に積ると。黄帝曰く、諸陽はみな濁、何ぞ陽独り甚しきかと。岐伯曰く、手の太陽は独り陽の濁を受け、手の太陰は独り陰の清を受く。その清なる者は上に空竅に走り、その濁なる者は下に諸経に行る。諸陰みな清、足の太陰独りその濁を受く。

[74] 『靈樞・天年第五十四』

黄帝 岐伯に問ひて曰く、願はくは人の始めて生まるる、何の氣を筑るを基と為すか。何を立てて楯と為すか。何を失ひて死するか。何を得て生くるかと。岐伯曰く、母を以って基と為し、父を以って楯と為し、神を失ふ者は死し、神を得る者は生くるなりと。黄帝曰く、何者を神と為すかと。岐伯曰く、血氣已に和し、宮衛已に通じ、五蔵已に成り、神氣 心に舍り、魄魂畢く具り、乃ち成りて人と為ると。

[75] 『靈樞・本神第八』

天の我に在る者は徳なり、地の我に在る者は氣なり。徳流れ氣薄って生まるる者なり。故に生の来るこれを精と謂ひ、兩精相搏ぶこれを神と謂ひ、神に隨いて往來する者これを魂と謂ひ、精に并きて出入する者これを魄と謂ふ。物に任ずる所以の者これを心と謂ひ、心に憶する所有るこれを意と謂ひ、意の存する所これを志と謂ひ、志に因って変を存するこれを思と謂ひ、思に因って遠く慕ふこれを慮と謂ひ、慮に因って物に処するこれを智と謂ふ。

三、病伝

〔128〕『素問・皮部論篇第五十六』

この故に百病の始め生ずるや、必ず先づ皮毛に客す。邪これに中れば則ち腠理開き、開けば則ち入り絡脉に客す。留りて去らざれば、経に伝入し、留りて去らざれば、府に伝入し、腸胃に虞る。邪の始め皮に入るや、漸然として毫毛を起し、腠理を開く。それ絡に入るや、則ち絡脉盛り、色を変ず。それ入り経に客するや、則ち盛り、虚すれば乃ち陷下す。それ筋骨の間に留り、寒多ければ則ち筋攣し骨痛む。熱多ければ則ち筋弛み骨消れ、肉燦け@破れ、毛直にして敗る。

帝曰く、夫子皮の十二部を言ふ、その病を生ずるはみな何如と。岐伯曰く、皮は、脈の部なり。邪皮に客すれば則ち腠理開き、開けば則ち邪入り絡脉に客し、絡脉満つれば則ち経脉に注ぎ、経脉満つれば則ち入り府蔵に舍るなり。故に皮には分部有り、与さざれば大病を生ずるなりと。

〔129〕『素問・玉機真蔵論篇第十九』

五蔵は氣をその生ずる所より受け、これをその勝たざる所に伝へ、氣は生ずる所に舍り、その勝たざる所に死す。病の且に死せんとするは、必ず先づ伝行しその勝たざる所に至り、病み乃ち死す。これ氣の逆行を言ふなり。故に死す。肝は氣を心より受け、これを脾に伝へ、氣は腎に舍り、肺に至りて死す。心は氣を脾より受け、これを肺に伝へ、氣は肝に舍り、腎に至りて死す。脾は氣を肺より受け、これを腎に伝へ、氣は心に舍り、肝に至りて死す。肺は氣を腎より受け、これを肝に伝へ、氣は脾に舍り、心に至りて死す。腎は氣を肝より受け、これを心に伝へ、氣は肺に舍り、脾に至りて死す。これみな逆死なり。一日一夜これを五分するは、これ死する者の早暮を占る所以なり。

五蔵相通じ、移るにみな次有り、五蔵に病有れば、則ち各々その勝つ所に伝ふ。治せざれば、法に三月若しくは六月、若しくは三日若しくは六日に、五蔵に伝はりて当に死すべし。これ勝つ所に順伝するの次なり。故に曰く、陽を別つ者は、病の従つて来るを知り、陰を別つ者は、死生の期を知ると。その困しむ所に至つて死するを言ふ。

この故に風は百病の長なり。今風寒 人に客せば、人の毫毛をして畢直せしめ、皮

膚閉じて熱を為す。この時に当り、汗して発す可し。あるいは痺不仁し腫痛す。この時に当り、湯にて熨しおよび火にて灸し刺してこれを去る可し。治せざれば、病入り肺に舍る。名づけて肺痺と曰ひ、咳上気を発す。治せざれば、肺即ち伝へてこれを肝に行る。病名づけて肝痺と曰ひ、一に名づけて厥と曰ひ、胸痛し食を出す。この時に当り、按じ若しくは刺す可きのみ。治せざれば、肝これを脾に伝ふ。病名づけて脾風と曰ひ、痺を發し、腹中熱し、煩心し黄を出す。この時に当り、按ず可く薬す可く浴す可し。治せざれば、脾これを腎に伝ふ。病名づけて疝瘕と曰ひ、少腹冤熱して痛み、白を出す。一に蠱と曰ふ。この時に当り、按ず可く薬す可し。治せざれば、腎これを心に伝へ、筋脈相引きて急するを病む。これを名づけて瘕と曰ふ。この時に当り、灸す可く薬す可し。治せざれば、十日に満ちて、法に当に死すべし。腎困ってこれを心に伝へ、心即ちまた反って伝えてこれを肺に行り、寒熱を發すれば、法に当に三日にて死すべし。これ病の次なり。

[130] 『素問・玉機真藏論篇第十九』

然れどもその卒かに發する者は、必ずしも伝により治せず、あるいはそれ伝化に次を以ってせざる有り。次を以って入らざる者、憂恐悲喜怒は、その次を以ってするを得ざらしむ。故に人をして大病有らしむ。困って喜び、大いに虚すれば、則ち腎氣乗じ、怒れば則ち肝氣乗じ、悲しめば則ち肺氣乗じ、恐るれば則ち脾氣乗じ、憂うれば則ち心氣乗ず。これその道なり。故に病に五有り、五五二十五變、その伝化に及ぶ。伝は、乗の名なり。

[131] 『素問・氣厥論篇第三十七』

黄帝問ひて曰く、五藏六府、寒熱相移る者は、何ぞやと。岐伯曰く、腎 寒を脾に移せば、癰腫し少氣す。脾 寒を肝に移せば、癰腫れ筋攣す。肝 寒を心に移せば、狂し、隔中す。心 寒を肺に移せば、肺消と為る。肺消は、飲むこと一溲すること一、死して治せず。肺 寒を腎に移せば、涌水と為る。涌水は、腹を按じて堅からず、水氣 大腸に客し、疾く行けば則ち鳴ること濯濯、囊に漿を裹むが如く、水の病なり。脾 熱を肝に移せば、則ち驚衄と為る。肝 熱を心に移せば、則ち死す。心 熱を肺に移せば、伝はりて鬲消と為る。肺 熱を腎に移せば、伝はりて柔@と為る。腎 熱を脾に移せば、伝はりて虚と為り、腸辟して死し、治す可からず。

胞 熱を膀胱に移せば、則ち癰し、溺血す。膀胱 熱を小腸に移せば、腸を鬲ぎ便せず、上に口糜を為す。小腸 熱を大腸に移せば、㊟瘕と為り、沈疴と為る。大腸熱を胃に移せば、善く食ひて瘦す。またこれを食亦と謂ふ。胃 熱を胆に移せば、また食亦と謂ふ。胆 熱を脳に移せば、則ち辛㊟鼻淵と為る。鼻淵は、濁涕下り止まざるなり。伝はりて衄㊟・瞑目と為る。故にこれを氣厥より得るなりと。

[132] 『素問・脈要精微論篇第十七』

帝曰く、病成りて変ずとは、何をか謂ふと。岐伯曰く、風成りて寒熱と為り、痺成りて消中と為り、厥成りて巔疾と為り、久しき風は飧泄と為り、脈風成りて癘と為る。病の変化、数ふるに勝ふ可からずと。帝曰く、諸々の癰腫筋攣骨痛は、これみな安くんぞ生ぜんと。岐伯曰く、これ寒氣の腫、八風の変なりと。

四、邪正虚実 客邪虚実

[133] 『素問・通評虚実論篇第二十八』

黄帝問ひて曰く、何をか虚実と謂ふと。岐伯対へて曰く、邪氣盛れば則ち実し、精氣奪へば則ち虚すと。帝曰く、虚実は何如と。岐伯曰く、氣虚は、肺虚なり。氣逆は、足寒ゆるなり。その時に非ざれば則ち生き、その時に当れば則ち死す。余蔵もみな此の如し。

[134] 『靈樞・刺節真邪第七十五』

黄帝曰く、一脈 数十病を生ずる者有り、あるいは痛み、あるいは癱し、あるいは熱し、あるいは寒し、あるいは痒く、あるいは痺し、あるいは不仁し、変化窮り無し。その故は何ぞやと。岐伯曰く、これみな邪氣の生ずる所なりと。黄帝曰く、余聞く氣なる者に、真氣有り、正氣有り、邪氣有りと。何をか真氣と謂ふと。岐伯曰く、真氣は、天より受くる所、穀氣と併せて身を充す者なり。正氣は、正風なり、一方より来り、実風に非ず、また虚風に非ざるなり。邪氣は、虚風の人を賊傷するなり。その人に中るや深く、自らは去る能はず。正風は、その人に中るや浅く、合して自ら去る。その氣来ること柔弱、真氣に勝つ能はず、故に自ら去る。

虚邪の人に中るや、洒淅として形を動かし、毫毛を起して腠理を發す。その入ること深く、内に骨を搏れば、則ち骨痺と為る。筋に搏れば、則ち筋攣と為る。脈中に搏れば、則ち血閉と為り、通ぜざれば則ち癰と為る。肉に搏り、衛氣と相搏へば、則ち

胞 熱を膀胱に移せば、則ち癰し、溺血す。膀胱 熱を小腸に移せば、腸を鬲ぎ便せず、上に口糜を為す。小腸 熱を大腸に移せば、㊟瘕と為り、沈疔と為る。大腸熱を胃に移せば、善く食ひて瘦す。またこれを食亦と謂ふ。胃 熱を胆に移せば、また食亦と謂ふ。胆 熱を脳に移せば、則ち辛㊟鼻淵と為る。鼻淵は、濁涕下り止まざるなり。伝はりて衄㊟・瞑目と為る。故にこれを氣厥より得るなりと。

[132] 『素問・脈要精微論篇第十七』

帝曰く、病成りて変ずとは、何をか謂ふと。岐伯曰く、風成りて寒熱と為り、痺成りて消中と為り、厥成りて巔疾と為り、久しき風は飧泄と為り、脈風成りて癘と為る。病の変化、数ふるに勝ふ可からずと。帝曰く、諸々の癰腫筋攣骨痛は、これみな安くんぞ生ぜんと。岐伯曰く、これ寒氣の腫、八風の変なりと。

四、邪正虚実 客邪虚実

[133] 『素問・通評虚実論篇第二十八』

黄帝問ひて曰く、何をか虚実と謂ふと。岐伯対へて曰く、邪氣盛れば則ち実し、精氣奪へば則ち虚すと。帝曰く、虚実は何如と。岐伯曰く、氣虚は、肺虚なり。氣逆は、足寒ゆるなり。その時に非ざれば則ち生き、その時に当れば則ち死す。余蔵もみな此の如し。

[134] 『靈樞・刺節真邪第七十五』

黄帝曰く、一脈 数十病を生ずる者有り、あるいは痛み、あるいは癱し、あるいは熱し、あるいは寒し、あるいは痒く、あるいは痺し、あるいは不仁し、変化窮り無し。その故は何ぞやと。岐伯曰く、これみな邪氣の生ずる所なりと。黄帝曰く、余聞く氣なる者に、真氣有り、正氣有り、邪氣有りと。何をか真氣と謂ふと。岐伯曰く、真氣は、天より受くる所、穀氣と併せて身を充す者なり。正氣は、正風なり、一方より来り、実風に非ず、また虚風に非ざるなり。邪氣は、虚風の人を賊傷するなり。その人に中るや深く、自らは去る能はず。正風は、その人に中るや浅く、合して自ら去る。その氣来ること柔弱、真氣に勝つ能はず、故に自ら去る。

虚邪の人に中るや、洒淅として形を動かし、毫毛を起して腠理を發す。その入ること深く、内に骨を搏れば、則ち骨痺と為る。筋に搏れば、則ち筋攣と為る。脈中に搏れば、則ち血閉と為り、通ぜざれば則ち癰と為る。肉に搏り、衛氣と相搏へば、則ち

陽勝る者は則ち熱を為し、陰勝る者は則ち寒を為し、寒すれば則ち真氣去り、去れば則ち虚し、虚すれば則ち寒す。皮膚の間に搏り、その氣外発し、腠理開き、毫毛揺らぎ、氣往来して微かに行けば、則ち痒を為し、氣留りて去らざれば則ち痺と為り、衛氣行らざれば則ち不仁と為る。虚邪偏に身半に客し、その入ること深く、内に營衛に居り、營衛やや衰うれば則ち真氣去り、邪氣独り留り、発して偏枯と為る。その邪氣浅き者は、脈偏に痛む。

〔135〕『素問・調經論篇第六十二』

帝曰く、実は何れの道より来るか。虚は何れの道より去るか。虚実の要、願はくはその故を聞かんと。岐伯曰く、それ陰と陽とはみな兪会有り、陽は陰に注ぎ、陰はこれが外を満たす。陰陽 平し、以ってその形を充たし、九候一の若き、命じて平人と曰ふ。それ邪の生ずるや、あるいは陰に生じ、あるいは陽に生ず。その陽に生ずる者は、これを風雨寒暑より得、その陰に生ずる者は、これを飲食居処、陰陽喜怒より得と。

帝曰く、風雨の人を傷るは奈何と。岐伯曰く、風雨の人を傷るや、先づ皮膚に客し、孫脈に伝入し、孫脈満つれば則ち絡脉に伝入し、絡脉満つれば則ち大経脉に輸る。血氣と邪と并せて分腠の間に客し、その脈堅大、故に実と曰ふ。実^いは外堅く充満し、これを按ず可からず、これを按ずれば則ち痛むと。帝曰く、寒湿の人を傷るは奈何と。岐伯曰く、寒湿の人を傷るや、皮膚収り、肌肉堅く、榮血泣り、衛氣去る。故に虚と曰ふ。虚は聶辟して氣足らず、これを按ずれば則ち氣以ってこれを温むるに足り、故に快然として痛まずと。

帝曰く、善し。陰の実を生ずるは奈何と。岐伯曰く、悲怒節あらざれば則ち陰氣上逆し、上逆すれば則ち下虚し、下虚すれば則ち陽氣これに走る。故に実と曰ふと。帝曰く、陰の虚を生ずるは奈何と。岐伯曰く、喜べば則ち氣下り、悲しめば則ち氣消え、消ゆれば則ち脈空虚に、寒の飲食に因り、寒氣 蔵を動かせば、則ち血泣り氣去る。故に虚と曰ふと

〔136〕『素問・調經論篇第六十二』

帝曰く、善し。余已に虚実の形を聞かも、その何を以って生ずるかを知らずと。岐伯曰く、氣血以って并め、陰陽相傾き、氣 衛に乱れ、血 形に逆し、血氣 居を離

れ、一は実し一は虚す。血 陰に并め、氣 陽に并む。故に驚狂を為す。血 陽に并め、氣 陰に并むれば、乃ち靈中と為る。血 上に并め、氣 下に并むれば、心煩^{まじり}し善く怒る。血 下に并め、氣 上に并むれば、乱れて善く忘ると。帝曰く、血 陰に并め、氣 陽に并め、此の如く血氣 居を離るるは、何者を実と為し、何者を虚と為すかと。岐伯曰く、血氣は、温を喜びて寒を悪む。寒すれば則ち泣り流るる能はず、温なれば則ち消りてこれを去る。この故に氣の并むる所は血虚を為し、血の并むる所は氣虚を為すと。

帝曰く、人の有る所は、血と氣とのみ。今夫子乃ち言ふ血并むるは虚を為し、氣并むるは虚を為すと、これ実無きかと。岐伯曰く、有る者は実と為し、無き者は虚と為す。故に氣并むれば則ち血無く、血并むれば則ち氣無く、今血と氣と相失ふ。故に虚と為す。絡と孫脈と俱に經に輸^{つゑ}り、血と氣と并むれば則ち実と為す。血と氣と并めて上に走れば、則ち大脈を為す。脈すれば則ち暴かに死し、氣また反れば則ち生き、反らざれば則ち死すと。

[137] 『靈樞・決氣第三十』

黄帝曰く、六氣なる者、有余と不足と、氣の多少、脳髓の虚実、血脉の清濁は、何を以てこれを知るか。岐伯曰く、精脱する者は、耳聾す。氣脱する者は、目明らかならず。津脱する者は、腠理開き、汗大いに泄^する。液脱する者は、骨属屈伸利せず、色天^{もつ}し、脳髓消え、脛瘦し、耳しばしば鳴る。血脱する者は、色白く、天然として^{つや}沢あらず。脈脱する者は、その脈空虚なり。これその候なりと。

黄帝曰く、六氣は、貴賤は何如と。岐伯曰く、六氣は、各々に部主有るなり。その貴賤善悪は、常に主ると為る可し。然れども五穀^{くわい}与に大海と為るなりと。

[138] 『素問・逆調論篇第三十四』

帝曰く、人の肉苛^{にくか}なる者は、衣絮^{じゆ}を近づくと雖ども、猶お尚お苛なるなり。これを何の疾と謂ふかと。岐伯曰く、榮氣虚すれば則ち不仁し、衛氣虚すれば則ち用^{うじ}かず、榮衛俱に虚すれば、則ち不仁し且つ用かず、肉は故の如くなり。人身と志と相有はざるは、死と曰ふと。

[139] 『靈樞・口問第二十八』

故に邪の在る所、みな不足を為す。故に上氣不足すれば、脳これが為に満たず、耳

①ハン、マン ぼく、かつらう、かつらい、
②ホン、モン わする、これり身、すぢみるこま、

尿

これが為に鳴るに苦しみ、頭これが為に傾き、目これが為に眩く。中氣不足すれば、
、洩便これが為に交じ、腸これが為に鳴るに苦しむ。下氣不足すれば、則ち痿厥足^{イカン、リウハン}
と為る。^{フシ、ソウ}

[140] 『靈枢・海論第三十三』

黄帝曰く、四海の逆順は奈何と。岐伯曰く、氣海有余なれば、則ち氣 胸中に満ち、
、^①息し面赤し。氣海不足すれば、則ち氣少なく以って言ふに足らず。血海有余なれば、
則ち常にその身大なるを想ひ、^{フツゼン}佛然としてその病む所を知らず。血海不足すれば、
、^{ハツゼン}則ち常にその身小なるを想ひ、^{ハツゼン}狹然としてその病む所を知らず。水谷の海有余なれば、
則ち腹満脹す。水谷の海不足すれば、則ち飢うるも穀食を受けず。髓海有余なれば、
則ち輕勁にして力多く、自らその度を過す。髓海不足すれば、則ち腦転じ耳鳴り、
、^{ハツゼン}脛痠し眩冒し、目見る所無く、^{ハツゼン}懈怠安臥す。

五、陰陽盛衰

[141] 『素問・陰陽応象大論篇第五』

陰勝れば則ち陽病み、陽勝れば則ち陰病む。陽勝れば則ち熱し、陰勝れば則ち寒す。
。重寒は則ち熱し、重熱は則ち寒す。寒は形を傷り、熱は氣を傷り、氣傷れて痛み、
形傷れて腫る。先づ痛んで後腫るる者は、氣 形を傷るなり。先づ腫れて後痛む者は、
、形 氣を傷るなり。風勝れば則ち動き、熱勝れば則ち腫れ、燥勝れば則ち乾き、寒
勝れば則ち浮き、^{ハツゼン}湿勝れば則ち濡す。

天に四時五行有り、以って生長収蔵し、以って寒暑燥湿風を生ず。人に五蔵の五氣
を化する有り、以って喜怒思憂恐を生ず。故に喜怒は氣を傷り、寒暑は形を傷る。暴
怒は陰を傷り、暴喜は陽を傷る。厥氣は上行すれば、脈に満ち形を去る。喜怒節あ
らず、寒暑度を過せば、生乃ち固からず。故に重陰は必ず陽、重陽は必ず陰。故に曰く
、冬に寒に傷らるれば、春に必ず温病となる。春に風に傷らるれば、夏に飧泄を生ず
。夏に暑に傷らるれば、秋に必ず^{ハツゼン}瘧となる。秋に湿に傷らるれば、冬に咳嗽を生ず
と。

帝曰く、陰陽に法るとは奈何と。岐伯曰く、陽勝れば則ち身熱し、腠理閉じ、喘粗
しこれが為に^{ハツゼン}仰し、汗出でずして熱し、齒乾きて煩冤し、^{ハツゼン}腹満して死す。冬に能へ
夏に能へず。陰勝れば則ち身寒し、汗出で、身常に清え、しばしば慄して寒し、寒す

①ハン、マン ぼく、かつらう、かつらい、
②ホン、モン わする、これり身、すぢみるこま、

尿

これが為に鳴るに苦しみ、頭これが為に傾き、目これが為に眩く。中氣不足すれば、
、洩便これが為に交じ、腸これが為に鳴るに苦しむ。下氣不足すれば、則ち痿厥足^{イカン、リウハン}
と為る。

[140] 『靈枢・海論第三十三』

黄帝曰く、四海の逆順は奈何と。岐伯曰く、氣海有余なれば、則ち氣 胸中に満ち、
、^①息し面赤し。氣海不足すれば、則ち氣少なく以って言ふに足らず。血海有余なれば、
則ち常にその身大なるを想ひ、^{フッセン}佛然としてその病む所を知らず。血海不足すれば、
、^{ハツツ}則ち常にその身小なるを想ひ、^{ハツツ}狭然としてその病む所を知らず。水谷の海有余なれば、
則ち腹満脹す。水谷の海不足すれば、則ち飢うるも穀食を受けず。髓海有余なれば、
則ち輕勁にして力多く、自らその度を過す。髓海不足すれば、則ち腦転じ耳鳴り、
、^{かいん、がれい、がれい}脛痠し眩冒し、目見る所無く、^{なま}懈怠安臥す。

五、陰陽盛衰

[141] 『素問・陰陽応象大論篇第五』

陰勝れば則ち陽病み、陽勝れば則ち陰病む。陽勝れば則ち熱し、陰勝れば則ち寒す。
。重寒は則ち熱し、重熱は則ち寒す。寒は形を傷り、熱は氣を傷り、氣傷れて痛み、
形傷れて腫る。先づ痛んで後腫るる者は、氣 形を傷るなり。先づ腫れて後痛む者は、
、形 氣を傷るなり。風勝れば則ち動き、熱勝れば則ち腫れ、燥勝れば則ち乾き、寒
勝れば則ち浮き、^ぬ湿勝れば則ち濡す。

天に四時五行有り、以って生長収蔵し、以って寒暑燥湿風を生ず。人に五蔵の五氣
を化する有り、以って喜怒思憂恐を生ず。故に喜怒は氣を傷り、寒暑は形を傷る。暴
怒は陰を傷り、暴喜は陽を傷る。厥氣は上行すれば、脈に満ち形を去る。喜怒節あ
らず、寒暑度を過せば、生乃ち固からず。故に重陰は必ず陽、重陽は必ず陰。故に曰く
、冬に寒に傷らるれば、春に必ず温病となる。春に風に傷らるれば、夏に飧泄を生ず
。夏に暑に傷らるれば、秋に必ず^{カキウ}瘧となる。秋に湿に傷らるれば、冬に咳嗽を生ず
と。

帝曰く、陰陽に法るとは奈何と。岐伯曰く、陽勝れば則ち身熱し、腠理閉じ、喘粗
しこれが為に^{ふむ}①仰し、汗出でずして熱し、齒乾きて煩冤し、^{ハツ}腹満して死す。冬に能へ
夏に能へず。陰勝れば則ち身寒し、汗出で、身常に清え、しばしば慄して寒し、寒す

れば則ち厥し、厥すれば則ち腹満して死す。夏に能へ冬に能へず。これ陰陽更勝の変、病の形能なり。

〔142〕『素問調經論篇第六十二』

帝曰く、經に言ふ陽虚すれば則ち外寒し、陰虚すれば則ち内熱し、陽盛れば則ち外熱し、陰盛れば則ち内寒すと。余已にこれを聞くも、その由って然る所を知らざるなりと。岐伯曰く、陽は氣を上焦より受け、以って皮膚分肉の間を温む。今寒氣外に在らば、則ち上焦通ぜず、上焦通ぜざれば則ち寒氣独り外に留る。故に寒慄すと。

帝曰く、陰虚は内熱を生ずとは奈何と。岐伯曰く、勞倦する所有れば、形氣衰少し、穀氣盛らず、上焦行らず、下脘通ぜず、胃氣熱し、熱氣 胸中を薰ず。故に内熱すと。

帝曰く、陽盛は外熱を生ずとは奈何と。岐伯曰く、上焦通利せざれば、則ち皮膚致密に、腠理閉塞し、玄府通ぜず、衛氣泄越するを得ず。故に外熱すと。

帝曰く、陰盛は内寒を生ずとは奈何と。岐伯曰く、厥氣上逆し、寒氣 胸中に積りて写せず、写せざれば則ち温氣去り、寒独り留り、則ち血凝泣し、凝れば則ち脈通ぜず、その脈盛大に以って濇なり。故に中寒す。

〔143〕『素問・太陰陽明論篇第二十九』

黄帝問ひて曰く、太陰と陽明とは表裏を為し、脾胃の脈なるも、病を生じて異なる者は何ぞやと。岐伯対へて曰く、陰陽 位を異にし、こもごも虚しこもごも実し、こもごも逆しこもごも従い、あるいは内よりし、あるいは外よりし、従る所同じからず、故に病は名を異にするなりと。帝曰く、願はくはその異なる状を聞かんと。岐伯曰く、陽は、天氣なり、外を主る。陰は、地氣なり、内を主る。故に陽道は実し、陰道は虚す。故に賊風虚邪に犯さるる者は、陽これを受く。食飲節あらず起居時あらざる者は、陰これを受く。陽これを受くれば則ち六府に入り、陰これを受くれば則ち五蔵に入る。六府に入れば、則ち身熱し、眠るを得ず、上に喘呼を為す。五蔵に入れば、則ち腹満閉塞し、下に飧泄を為し、久しくして腸@を為す。故に喉は天氣を主り、咽は地氣を主る。故に陽は風氣を受け、陰は湿氣を受く。故に陰氣は足より上行し頭に至りて、下行して臂を循り指の端に至る。陽氣は手より上行し頭に至りて、下行して足に至る。故に曰く、陽病は、上行極りて下り、陰病は、下行極りて上ると。故に風に傷

らるる者は、上先づこれを受け、湿に傷らるる者は、下先づこれを受くと。

[144] 『生氣通天論篇第三』

陽氣は、天と日との若し。その所を失へば、則ち寿を折ひて彰かならず。故に天運は当に日を以て光明なるべし。この故に陽は因って上り外を衛る者なり、枢運るが如きを欲す。起居もし驚かば、神氣乃ち浮く。寒に因れば、体 燔炭の如く、汗出でて散ず。暑に因れば、汗し、煩すれば則ち喘喝し、静かなれば則ち言多し。湿に因れば、首 裹まるるが如く、湿熱攘らず、大筋@短し、小筋弛長す。@短は拘を為し、弛長は痿を為す。氣に因れば、腫を為す。四維相代り、陽氣乃ち竭く。

陽氣は、煩勞すれば則ち張り、精絶へ、夏に辟積し、人をして煎厥せしめ、目盲ひ以て視る可からず、耳閉じ以て聴く可からず、潰潰呼として壞都の若く、@@呼として止む可からず。陽氣は、大いに怒れば形氣絶へて、血 上に@り、人をして薄厥せしめ、筋に傷る有り、^{ニル}縦み、^{ヲヒ}それ容かざるが若く、汗出づること偏へに沮み、人をして偏枯せしむ。汗出で湿に^ミ見へば、乃ち^ヲ座を生ず。高粱の変は、これ大丁を生じ、受くること虚を持つが如し。勞し汗し風に当り、寒薄れば^ヲを為し、鬱すれば乃ち座となる。

陽氣は、精なれば則ち神を養ひ、柔なれば則ち筋を養ふ。^{カイコウ}開闔得ず、寒氣これに従へば、乃ち大痲を生ず。脈に陷るは瘰を為し、肉腠に留連し、愈氣化し薄れば、伝はりて善畏を為し、および驚駭を為す。營氣従はず、肉理に逆すれば、乃ち癰腫を生ず。魄汗未だ尽きず、形弱くして^シ氣燄え、穴愈以て閉ずれば、発して風瘧と為る。

故に風は百病の始めなり。清浄なれば則ち肉腠閉拒し、大毒苛毒有ると雖ども、これを害する能はず。これ時の序に因るなり。故に病久しければ則ち伝化し、上下并はず、良医も為さず。故に陽に蓄積すれば病み死す。しかして陽氣当隔すれば、隔する者当に写すべし。すみやかに正治せざれば、粗乃ちこれを敗る。

[145] 『素問・逆調論篇第三十四』

黄帝問ひて曰く、人身 常の温に非ず、常の熱に非ざるなり。これが熱を為して煩満する者は何ぞやと。岐伯曰く、陰氣少なくして陽氣勝る。故に熱して煩満するなりと。帝曰く、人身 衣の寒に非ず、中り寒氣有るに非ざるなり。寒 中より生ずる者は何ぞやと。岐伯曰く、これ人瘵氣多きなり。陽氣少なく、陰氣多し。故に身寒す

ること水中より出づるが如しと。

帝曰く、人に四支の熱有り、風に逢ひて火に炙るが如き者は、何ぞやと。岐伯曰く、この人は陰気虚し陽気盛る。四支は陽なり。両陽相得て陰気虚少に、少水 盛火を滅する能はず、しかして陽独り治る。独り治る者は、生長する能はず。独り勝りて止むのみ。風に逢ひて火に炙るが如き者は、この人当に肉燂すべしと。

帝曰く、人に身寒有り、湯火にても熱する能はず、厚衣にても温むる能はず、然れども凍慄せず、これ何の病と為すかと。岐伯曰く、この人もと腎気勝り、水を以って事と為し、太陽の気衰へ、腎脂枯れ長ぜず。腎は水なり、しかして骨を主る。腎生ぜざれば則ち髓満つる能はず。故に寒甚だしく腎に至るなり。凍慄する能はざる所以は、肝は一陽なり、心は二陽なり、腎は孤蔵なり、一水は二火に勝る能はず。故に凍慄する能はず。病名づけて骨痺と曰ふ。この人当に攣節すべし。

七、痛証

[1 7 3] 『素問・挙痛論第三十九』

帝曰く、願はくは人の五蔵卒かに痛むは、何の氣然らしむるかを聞かんと。岐伯対へて曰く、経脉は流行し止まず、環周し休まず。寒氣これに入れば、経血稽治し、泣りて行らず、脈外に客すれば則ち血少なく、脈中に客すれば則ち氣通ぜず、故に卒然として痛むと。

帝曰く、その痛みあるいは卒然として止む者、あるいは痛み甚だしく休まざる者、あるいは痛み甚だしく按ずる可からざる者、あるいはこれを按じて痛み止む者、あるいはこれを按じて益無き者、あるいは喘動し手に応ずる者、あるいは心と背と相引きて痛む者、あるいは胸肋相引きて痛む者、あるいは腹痛み陰股に引く者、あるいは痛み宿昔にして積と成る者、あるいは卒然として痛み死し人を知らず、少しき間有りまた生きる者、あるいは痛みて嘔する者、あるいは腹痛みて後泄する者、あるいは痛みて閉じ通ぜざる者あり。凡そこの諸痛は、各々形を同じくせず、これを別つことは奈何と。

岐伯曰く、寒氣 脈外に客すれば則ち脈寒し、脈寒すれば則ち縮蹇し、縮蹇すれば則ち脈@急し、@急すれば則ち外に小絡を引く。故に卒然として痛む。 を得れば則ち痛み立ちどころに止む。重ねて寒に中るに因れば、則ち痛み久し。寒氣 経脉の中に客し、 氣と相薄へば則ち脈満ち、満つれば則ち痛みて按ずる可からず。寒氣

稽留し、 氣これに従えば、則ち脈充大にして血氣乱る。故に痛み甚だしく按ずる可からず。寒氣 腸胃の間、膜原の下に客し、血散ずるを得ず、小絡急引するが故に痛む。これを按ずれば則ち血氣散ず。故にこれを按じて痛み止む。寒氣 俠脊の脈に客すれば則ち深く、これを按ずるも及ばず。故にこれを按ずるも益無きなり。寒氣 衝脉に客す。衝脉は関元に起り、腹に随って直に上る。寒氣客すれば則ち脈通ぜず、脈通ぜざれば則ち氣これに因る。故に喘動し手に嘔ず。寒氣 背俞の脈に客すれば則ち脈泣り、脈泣れば則ち血虚し、血虚すれば則ち痛む。その俞は心に注ぐ。故に相引きて痛む。これを按ずれば則ち熱氣至り、熱氣至れば則ち痛み止む。寒氣 厥陰の脈に客す。厥陰の脈は、陰器を絡ひ、肝に懸かる。寒氣 脈中に客すれば則ち血泣り脈急す。故に胸肋と少腹と相引き痛む。寒氣 陰股に客すれば、厥氣上り少腹に及び、血泣り下に在り相引く。故に腹痛み陰股に引く。寒氣 小腸膜原の間・絡血の中に客すれば、血泣り大経に注ぐを得ず、血氣稽留し行るを得ず。故に宿昔にして積と成る。寒氣 五蔵に客すれば、厥逆し上に泄れ、陰氣竭み、陽氣未だ入らず。故に卒然として痛み死し人を知らず、氣また反れば生く。寒氣 腸胃に客すれば、厥逆し上に出づ。故に痛みて嘔するなり。寒氣 小腸に客すれば、小腸 聚を成すを得ず。故に後泄し腹痛む。熱氣 小腸に留れば、腸中痛む。瘧熱焦渴すれば、則ち便堅く出づるを得ず。故に痛みて閉じ通ぜず。